イーダの長い夜 上

ラ・ストーリア

エルサ・モランテ

千種堅＝訳

イーダの長い夜

ラ・ストーリア

上

エルサ・モランテ

千種堅＝訳

集英社

イーダの長い夜 ラ・ストーリア——上

定価一、四〇〇円

一九八三年一一月一〇日第一刷印刷
一九八三年一一月二五日第一刷発行

著者——エルサ・モランテ
訳者——千種 堅
装幀者——テン・グラフィス株式会社
装画——福田典高
発行者——堀内末男
印刷所——大日本印刷株式会社
発行所——株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二〜五〜一〇
郵便番号一〇一
電話(238)二八四二番(出版部)
(230)六一七一番(販売部)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

LA STORIA
by Elsa Morante
Copyright © 1974 by Elsa Morante
Japanese translation rights arranged
with Agenzia Letteraria Internazionale, Milan
and Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

© *1983* Shueisha, Printed in Japan
ISBN4-08-773053-0 C0097

イーダの長い夜　ラ・ストーリア――上

自分たちがなぜ死ぬのか知らないモルモットを
慰められるような言葉はどの国語にもない。
（広島で生き残った者）

……此等のことを智きもの慧き者に隠して、
嬰児に顕したまえり……
……此のごときは御意の適えるなり……

ルカ伝X―21

Por el analfabeto a quien escribo[原註1]

（文字を読めない人のために、その人のためにこそわたしは書く）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

……一九＊＊年

「……カタログを一部、パンフレットを一部手に入れてもらうことです、なぜってね、お母さん、ここにいると、上流社会の新しい出来事が分からないものですから……」

（シベリアの書簡から）

……一九〇〇―一九〇五年

物質の構造にかんする最新の科学的発見が原子力時代の幕開けを告げる。

一九〇六―一九一三年

上流社会の消息はそれほどあるものではない。これまで地上で過ぎ去った何百年、何千年と同じで、この新しい世紀もまた、あのよく知られた一方には権力、他方には隷属という歴史の動力が持つ不変の原則にのっとって進んで行く。そして現実にはいわゆる資本主義的「権力」によって支配されている社会の内的秩序も、また、いわゆる「強国」という名の数ヵ国に支配されている国際間の外的な秩序（帝国主義と呼ばれている）もひとしくこの上に築かれているが、この強国なるものが実際には地表全体をそれぞれ自己の領土とし、あるいは帝国として分けあっている。さいごにイタリアもその仲間入りをし、強国と一線に並ぶことを願い、それ相当の実力を備えるべく、自国より弱体の国々の軍隊を使い、領土を拡張し、小さな植民地を作ったものの、まだ帝国の風格はなかった。

常に脅迫しあい、武器をかまえて競い合っている強国同士だが、自己の利益（国内的には「権力」の利益と理解されるべきだ。それ以外の人びと、つまり、恩恵にあずかることもないのに、働いて隷属に甘んじている人びとは、こうした利益を観念的抽象的な用語として受けとめ、その用語は宣伝のやり方次第で変ってくる。今世紀の最初の数十年間、好まれた用語は祖国である）を共同で守る段になると、そのたびごとにブロックに結集する。

ヨーロッパでは最大の権力がふたつのブロックに分かれて争っているのが現実である。フランス、英国、帝政ロシアの三国協商と、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、イタリアの三国同盟である（イタリアはその後、協商に移ることになる）。

すべての社会的、政治的動きの中枢には大企業が陣取って、すでにかなり以前からその巨大な上昇一途の発展力によって大量生産の産業体系にと成長していた（その結果、労働者は「機械の単なる付属物」に堕している）。大量生

産が機能し消費されるために、企業は大衆を必要とするが、その逆の場合もある。そして、企業の仕事が常に権力と強国に対する奉仕である以上、製品の中で第一の地位を占めるのは必然的に武器であり（軍拡競争）、大量消費の経済を基盤とする以上、武器は大規模な戦争にこそ吐け口を見出す。

一九一四年

対立するふたつの強国のブロック間で第一次世界大戦が始まり、他の同盟国や属国がつぎつぎと参戦する。軍需産業の新しい（あるいは改良された）製品が実戦で使用され戦車と毒ガスがその中に入る。

一九一五―一九一七年

国内の大きな反戦勢力（したがって敗北主義者と呼ばれている）を圧倒していたのが国王であり、国家主義者であり、三国協商側に立ったイタリアの参戦により利益を受けるさまざまな勢力である。そのほかでは、超大国のアメリカ合衆国までが後に協商側に加担する。

ロシアではレーニンとトロツキイのひきいる国際社会主義・共産主義路線により大規模なマルクス主義革命が起って、強国との戦争が中止される（「労働者には祖国がない」「戦争を闘争に押し進めること」「帝国主義戦争を内乱に変えること」）。

一九一八年

第一次世界大戦は協商側とこれに加盟した勢力の勝利で終る（戦勝国二十七国、その中には日本帝国も入っている）。死者一千万。

一九一九―一九二〇年

戦勝国とその同盟者を代表して七十名の使節が平和会議に出席、彼らの間で世界の新しい分割を定め、ヨーロッパの新しい地図を作る。いまや敗戦国となったかつての指導的な諸帝国の瓦壊、分割にともない、これら諸国の植民地所有権を戦勝諸国に譲渡すること、民族自決の原則に基づいてヨーロッパの新しい独立国を認めることが決められる（アルバニア、ユーゴスラビア、チェコスロバキア、ポーランド）。また、ドイツに対してはダンチヒの水路（ポーランドを通って海に出られる利点がある）の譲渡が求められ、このため国土はふたつに分断される。

イタリアをふくめた若干の調印国から、この平和の条件では不充分で、一時しのぎだと異議をはさまれ（不具の平和）、飢えと絶望に追いこまれた敗戦国の民衆には耐え難いものとなった（懲罰的平和）。

ロシアは平和会議には欠席した。というのも主要な強国

（フランス、英国、日本、米国）が赤軍を敵にまわす内戦に軍事介入して、その結果、ロシアはいまや外国軍に包囲され、国際的な戦場になったからだ。この苦しい試練をへて、虐殺、疫病、貧困にさいなまれながら、モスクワにコミンテルン（国際共産党）が創設され、人種、言語、国籍の別なく、世界のすべてのプロレタリアートに、プロレタリアートの国際的共和国をめざし、革命的統一という共通の義務を果すよう呼びかける。

一九二二年

数年にわたるロシアの内戦は革命勢力の勝利をもって終りを告げ、新しい国家、ソビエト連邦が誕生した。勝者と敗者を問わず、戦争の結果、前にもまして不幸になった「この世で苦しむ」すべての人びとにとって、この国は希望のシンボルとなるのに対し、一方強国にとっては、また、戦争をもっぱら途方もない投機に利用した地主、企業家にとっては、例の共産主義の亡霊となるはずでその影がいまげんにヨーロッパをおびやかしている。

そうした投機家たちもイタリア（彼らの最も醜悪な支部のひとつがここにある）では、おのれの利益を徹底的に収奪するため、自分たちに奉仕するものや、不具の平和に一矢むくいようという広範な層と手を結んでいる。そして、平凡な立身出世主義者で、病めるイタリアの「あらゆる屑をよせ集めた」ベニート・ムッソリーニのような人物を自分たちの指導者と仰ぎ、格好の傀儡とするのは時間の問題だった。彼は社会主義の看板をかかげて躍り出たものの、権力の座にある反対の看板（ボスたち、国王、それにつづいて教皇まで）に鞍替えした方が有利だと気づいた。そこで最初から断固とした、脅迫的な、安っぽい反共を歌い文句に、ブルジョワ革命の信奉者と凶漢の一党である自分なりの結束（ファッシ）を作り上げた（ここからファシズムが出てくる）。そして同じような仲間とかたらい、金で左右されるような、寄せあつめの粗末な行動隊のテロリスト的暴力で、自分のお得意様の利益を守るよう心がける。そのような彼に対してイタリア国王（王としての世襲の称号のほかには、特に挙げるべき長所を持ち合わせていない人物）は、国民の政府を自分から進んで譲ってしまう。

一九二四―一九二五年

ロシアではレーニンの死。スターリン（鋼鉄）と名のったその後継者の下では、国内的な必要（集団化、工業化、反共で結束した列強に対する防衛など）から、コミンテルンとトロツキイの理想（永久革命）もスターリン理論（一国社会主義）のために一時保留という形になる。その結果、マルクスの予想したプロレタリアート独裁も政党による階級的独裁に変り、スターリンの個人独裁にと堕する。

イタリアではファシスト・ムッソリーニの独裁だが、こちらは自分自身の権力の基盤を固めるため、それにふさわしい煽動の方式を考え出した。この方式は、自分たちの凡庸さを隠すため偽りの理想をかかげる（悲しいことに真の理想は手にあまるからだ）中産階級を対象とし、内容はイタリア人の栄光ある血統を称え、歴史上の大強国であるシーザーのローマ帝国の正当な継承者たることを訴えている。この方式や、そのほかの民族的な指導原理が功を奏して、ムッソリーニは「大衆の偶像」に祭り上げられ、ドゥーチェ（党首、隊長、指導者）の称号を受けることになる。

一九二七―一九二九年

中国では国家主義の中央政権に対抗して、毛沢東のひきいる革命的共産主義者のゲリラ活動が始まる。

ソ連では反対派の敗北。トロツキイは党から、そして後にはソビエト連邦からも追放される。

ローマでは教皇庁とファシズムの間にラテラノ条約が結ばれる。

一九三三年

イタリアと似通った状況下で、ドイツでは既成の権力が国の統治をドイツ・ファシズム（ナチズム）の創始者、アドルフ・ヒトラーにゆだねたが、疫病神で、死の悪徳にとりつかれた（「その目的は生命力の駆除である」）この人物もまた彼なりに、総統（フューラー）の称号をもって大衆の偶像にのし上がり、ゲルマン民族が他のすべての民族に超越していることを超権力の公式として取り上げる。その結果、大ドイツ帝国がすでに立てていた計画により、ユダヤ人に始まるすべての劣等な人種の全面的な奴隷化と虐殺に走らざるをえなくなる。ユダヤ人の組織的な迫害がドイツで始まる。

一九三四―一九三六年

国家主義的政府（国民政府）の圧倒的に優勢な軍隊を包囲すべく、中国を横断する毛沢東の長征が行なわれる（一万二千キロ）。紅軍一億三千万人のうち、生きて到着したのは三千万である。

ソ連ではスターリン（彼もいまでは「大衆の偶像」となっている）が、党や軍隊の古参革命家をしだいに物理的に排除して行きながら「大粛清」を始める。

党首の侵略方式により、イタリアは軍事力をもってエチオピア（アフリカの独立国）を掌中におさめ、帝国への道を歩む。

スペインでは内戦、これは「亡霊」におののく在来の権力に奉仕するため、カトリック＝ファシストのフランコ（大元帥、総統と呼ばれる）が引き起したもの。三年にわたる破壊と虐殺（とにかく、住宅中心の都市に対して空か

らする破壊がヨーロッパで始まるのだ）の末、党首とドイツ総統の積極的な援助、世界の列強すべての黙認を得てファシスト（ファランヒスタ）が優勢に立つことになる。

総統と党首はいわゆる鋼鉄の軍事条約によって固められたローマ＝ベルリン枢軸に結束する。

一九三七年

日本帝国は枢軸国側と反コミンテルンの条約を結んだうえで中国を侵略し、これに対して中国では侵略者に共同戦線で立ち向かうため、内戦が一時的に中断される。

ソ連（共産主義に敵意を抱く世界的な風潮の中で政治的に孤立している）では、スターリンが国内的には恐怖体制を強化して行く一方、列強との対外関係では、次第にレアル・ポリティーク（現実主義的政治）の客観的戦略を採用していく。

一九三八年

ソ連では官僚制度の頂点から国民大衆の末端にまで恐怖のスターリン体制がひろがっている（おびただしい数にのぼる逮捕、強制労働キャンプへの流刑、死刑があいつぎ、容赦なく、勝手気ままに決められ、爆発的にその数をまして行く）。にもかかわらず、この地球上に住む大多数の被抑圧者たちは――それも、事実を知らされず、だまされたままでいるのだ――常にソ連のことを、自分たちの希望が叶えられる唯一の祖国と見ている（これよりほかに希望がないとあれば、それをこばむのは難しい）。

枢軸国側と西欧民主主義国の首脳の間でミュンヘン協定。

ドイツではクリスタルと呼ばれるあの血なまぐさい夜以来、ドイツ市民は現実にユダヤ人を自由に集団虐殺してもよいという権利を与えられた。

同盟国ドイツの示唆に従って、イタリアも独自の人種法を公布する。

一九三九年

西欧列強を相手にミュンヘンで和解の義務を負って間もないというのに、ヒトラーは自分独自の計画を確立しようと意図し、何よりもまず、二十年前の懲罰的平和にさからって、ドイツ帝国の諸権利を回復することにする。そのため、オーストリアを合併したあと、総統はチェコスロバキア侵略を始め（その後すぐ党首がまねて、アルバニアを併合する）、そのうえでスターリン主義の強国を相手に外交交渉を始める。

この交渉の結果がナチス・ドイツとソビエト連邦の間の不可侵条約であり、これによって両当事者はポーランドの同時侵攻と共同分割を可能とする。西部ポーランドに対するヒトラー軍の直接行動に対処して、フランス、英国がドイツに宣戦を布告し、これが第二次世界大戦のきっかけと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なる。

この準備に当ったのが軍需産業の間断ない、不眠不休の活動であり、軍需産業は数百万という生きた人間を機械的に利用して、新しい製品（最初のころのものには、武器も装甲設備も超弩級のパンツェルという戦車、カッチャ戦闘機、それに航続距離の大きな爆撃機などがある）を供給する。

その一方、自己の戦略上のプラン（すでにドイツ帝国との衝突を避け難いと見ている）の具体化にそなえて、スターリンは協定に従って東からポーランドに侵入したあと、バルチック諸国を強制的に屈服させようとして、意外にもフィンランドの頑強な抵抗にあうが、フィンランドも結局はソ連軍に屈服する。ソ連の工業もまた全体主義的な義務から兵器の大量生産に取り組み、とりわけ高性能の炸裂薬を使った近代的なロケット打ち上げ技術を応用する。

一九四〇年　春―夏

第二次世界大戦の最初の局面を示すのが総統の電撃作戦であり、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグを占領したあと、フランスを破り、パリの門戸にまで達する。ここまでは半分中立でいた党首も、いまや勝利の間近いことを確信して、今度は鉄の条約を厳密に守ることに決め（「わしが平和条約の席につくには、数千の死者という犠牲が要るのだ」）、ドイツ軍がパリに入る四日まえ、英国とフランスに宣戦を布告する。ところがヒトラーのその後の勝利や和平提案にもかかわらず、英国は後退する様子をみせず、逆に必死の抵抗を試みる。その一方、イタリアの介入は地中海やアフリカの新しい戦線に火をつけるのを決定づける。枢軸のブリッツ＝クリーグ、すなわち電撃戦は予想を越えたピッチでひろがり、進展して行く。

英国に対するヒトラーの空からの攻撃、絶え間ない爆撃、道路、港湾、諸施設、住宅区域の徹底的な破壊。コヴェントリザーレ（主として空襲で都市を完全に破壊すること）という言葉が辞書に入っているが、これはドイツ軍の空襲で粉砕された英国の都市コヴェントリーに由来する。英国の抵抗を打破する意図で何週間も、何ヵ月も休みなくテロリスト的な戦闘を行ったものだが（事態を解決するのに降下作戦も考えられた）、所期の効果を上げるに至らなかった。

西部で作戦が行なわれているからといって、東部でソ連を叩く次の作戦の秘密計画をおろそかにする総統ではない（大ドイツ帝国の歴史的な計画にうたわれた作戦で、スラヴの劣等民族を絶滅するとともに、ボリシェヴィキの亡霊を地上から抹殺することになっている）。だが、ここでも総統は作戦の危険度のほか、敵の資源まで過小評価してしまう。

ユーラシアに「新秩序」（帝国とファシストの）を設けることを計画したドイツ＝イタリア＝日本の三国条約。この条約に応じるのがハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、スロバキア、ユーゴスラビア。

一九四〇年　秋―冬

イタリアのギリシャ急襲、当局者は「気楽なピクニック」と言明する。ところが計算を誤まった作戦はイタリアにとって破滅的な結果となり、ギリシャ人の手で駆逐されたあげくに、算を乱して敗走し、食糧もないまま、エピルス山中で冬将軍に襲われる。

イタリア艦隊は地中海で甚大な被害を受ける。

北アフリカでは砂漠の英軍の威嚇を受けて、イタリア守備軍が防備に苦しむ……

一九四一年
一月のある日
ローマのサン・ロレンツォの界隈を
ひとりのドイツ兵士が歩いていた。
イタリア語は片言がせいぜいで
世間のことはほとんど、いや、何も知らなかった。
名前はギュンターといった。
姓はいまだに分からない。

1

一九四一年一月のある日、転戦中のドイツの兵士が午後の自由時間を楽しみながら、ローマのサン・ロレンツォの界隈をひとりで散策していた。午後の二時ごろで、いつもながらこの時間は街をぶらぶらしている人はほとんどいなかった。それに、通行人は誰も兵士に目を向けなかった。というのも、今次世界大戦でドイツ人はイタリア人の盟友であったにもかかわらず、貧民窟あたりでは評判が悪かったからである。また、その兵士にしてからが、他の同僚の兵士とくらべてとりわけ目立つというところがなかった。同じように背が高く、金髪で、軍律きびしい狂信者ならではの挙動、とりわけ帽子のかぶり方に、見る人をいらだたせるドイツ兵の共通点があった。

もちろん、じっと観察の目を向ければ、この男にも何がしかの特徴が見つかったはずである。たとえば、行軍の歩調とは対照的に、その眼差しは悲しげであった。そして、身長は一メートル八十五ほどもあろうというのに、その顔にはおどろくばかりのあどけなさがありありとみえた。また、ドイツ帝国の軍人としては、特にその緒戦の時期としては本当に奇妙な話だが、その制服は仕立ておろしで、やせた身体に合うようきちんと着こなしていたにもかかわらず、胴と袖が短く、百姓や庶民ならではのごつつく、大きな無骨な手首がむき出しになっていたのである。

というのも実はこの夏と秋で身長がやたらと伸びてしまったからで、しかもこんなに馬鹿みたいにのっぽになりながら、まだ年端が行かぬとあって、顔の方は昔ながらのあどけなさだった。顔だけ見た分には、こんな子供が二等兵かと文句が出かねまい。彼は召集されたばかりのほやほやの新兵だった。そして兵役に召集されるまでは、兄弟や未亡人の母親といっしょに、ずっとミュンヘン近郊のババリアの生家で暮らしてきたのだ。

彼の住所は正確にいえばダハウという田舎村で、ここはその後、戦争が終ろうという頃になって「強制労働と生物学実験」をこととする隣接の強制収容所で有名になる。だが、青年がこの村で育っていた頃には、その常軌を逸した虐殺機械もまだ初期の実験段階で、内密にされていた。その界隈はもちろん外国でも、ここは精神異常者のモデル療養所のようなものだと評判になっていた程度だ……。当時、ここにはおそらく五、六千人は入っていたのだろうが、キャンプの人々は年々、数を増していった。結局、一九四五年には、死体の総数は六六、四二八体となった。

しかし、この新兵がひとりでいかに探りを入れてみたところで、得体の知れぬ未来をきわめるなど(明らかに)できるわけがないので、過去についても同じことがいえた。第

一、いまのこの現在にしてからが、これまでのところ全く複雑に入り組んでいて、彼に分かっていることなどわずかだし、限られていた。彼にしてみれば、ババリアにあるその母なる村は、運命の乱舞の中では唯一の、まごうかたなき、家庭的なよりどころにあたっていた。兵隊になるまで、村を出てよそに行くといえば隣りの町のミュンヘンぐらいで、ここへは電気機械工の仕事があって出かけたのだが、さいきんは年上の売春婦を相手に男女のことも覚えるようになっていた。

冬のその日、ローマは曇っていて東南風(シロッコ)が吹いていた。「祭はすべて過ぎて行く」で主顕節もきのうで終り、兵士が家族と家ですごしたクリスマス休暇もつい数日前に終っていた。

名前はギュンターといった。姓は分かっていない。

最終目的地に向かう移送をひかえ、ほんの短期間駐屯することになり、その朝からローマの市街に出るのを許された。最終目的地は参謀部だけが知っていて、兵隊には知らされていなかった。だが、彼の部隊の戦友たちの間では、本当の目的地はアフリカではないかという噂がひそかに流れていた。アフリカでは同盟国イタリアの植民地を守るため、守備隊を作ることになるらしいというのがもっぱらの噂だった。出発のとき、この話を聞いた彼は、本物のエキゾチックな冒険を期待し、感動したものである。

「アフリカー」旅をするといえば、自転車か、ミュンヘン行きのバスしか経験のない、ほんの青二才の青年にとって、これはあこがれの地名である。

「アフリカー　アフリカー」

……千もある太陽に一万の太鼓
ザンズ・タムタム・バオバブ・イバールー
千の太鼓に一万の太陽
パンとカカオの木の上に。
赤にオレンジ、緑に赤と
猿たちは遊ぶ、椰子の実を蹴って。
現われいでたる魔法使いの長、ムブヌムヌ・ルブムブ
おうむの羽の日傘(かさ)の下に!!!
現われいでたる白人の野盗、野牛に打ちまたがって
ドラゴとアトランテの山々を歩く野牛に
ザンズ・タムタム・バオバブ・イバール
蟻喰いが群をなしてとびかかってくる
河ぞいの森のアーケードに!
おれには黄金とダイヤの小屋があり
おれの屋根にはだちょうが巣を作り
おれは首狩り族と踊りに行く。
おれはがらがら蛇をうっとりさせた。
赤にオレンジ、緑に赤と
ルウェンツォリのハンモックで眠る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com